

令和6年度大台ヶ原自然再生推進委員会

議事概要

1. 日時 令和7年3月4日(火) 13:30~16:30
2. 場所 ミグランス橿原市役所分庁舎 4階コンベンションルーム
3. 参加者

【委員】

木佐貫 博光	三重大学大学院生物資源学研究科 教授
佐久間 大輔	大阪市立自然史博物館 学芸課長(欠席)
高田 研一	高田森林緑地研究所 所長
高柳 敦	京都大学大学院農学研究科 准教授(ニホンジカ管理 WL)
松井 淳	奈良教育大学教育学部 特任教授(森林生態系 WL)
村上 興正	元京都大学理学研究科 講師(持続可能な利用 WL)
揉井 千代子	公益財団法人 日本野鳥の会奈良支部 幹事
八代田 千鶴	国立研究開発法人 森林総合研究所関西支所 主任研究員
横田 岳人	龍谷大学先端理工学部 准教授(生物多様性 WL、中間評価・計画見直し WL)

【オブザーバー】

近畿運輸局 交通政策部 交通企画課(欠席)	
近畿運輸局 奈良運輸支局 企画輸送・監査部門(欠席)	
近畿中国森林管理局 計画保全部 保全課	徳田 隆 企画官
近畿中国森林管理局 計画保全部 計画課	碓谷 太成 生態系保全係員
近畿中国森林管理局 三重森林管理署	中島 富太郎 地域林政調整官
奈良県 総務部知事公室 美しい南部東部振興課	中西 清貴 主幹
奈良県 食農部農業水産振興課	伊村 孝信 主幹
奈良県 環境森林部 景観・自然環境課	染川 さおり 課長補佐
〃	田垣内 政信 指導技能員
三重県 農林水産部獣害対策課	鶴岡 建汰 主任
上北山村 企画政策課	西川 宏幸 主事補
奈良県猟友会 上北山支部(欠席)	
川上村 水源地課	深堀 円 主任
大台町 産業課	西出 覚 係長
上北山村商工会(欠席)	
一般社団法人 三重県猟友会	中垣 和穂 会長
近畿日本鉄道株式会社 運輸部 営業課(欠席)	
奈良交通株式会社 乗合事業部(欠席)	
一般社団法人 奈良県タクシー協会(欠席)	
有限会社 OM 環境計画研究所	大森 淳平 杉山 拓次

【事務局】

環境省近畿地方環境事務所	伊藤 賢利	所長
	八元 綾	統括自然保護企画官（国立公園課長）
	平野 淳	国立公園課長補佐
	西野 敦	自然環境調整専門官
	高橋 明子	国立公園課国立公園利用企画官
	岡島 一徳	野生生物課長
	柳田 花歩	野生生物課
	榎本 和久	自然環境整備課長
	石月 聖文	自然環境整備課長補佐
	平木 悦雄	自然環境整備課長補佐
	岡島 広周	自然公園整備課
吉野熊野国立公園管理事務所	楊木 萌	国立公園管理官
吉野管理官事務所	安藤 滉一	国立公園管理官
	丸毛 絵梨香	生態系保全等専門員
	濱田 菜月	自然保護官補佐
(株) KANSO テクノス	樋口 高志	環境事業部 マネジャー
	樋口 香代	環境事業部 リーダー
	岸上 真子	環境事業部
	長島 文香	環境事業部
(一財) 自然環境研究センター	千葉 かおり	第2研究部 研究主幹
	中田 靖彦	第1研究部 上席研究員
	湯瀬 智世	第1研究部 主任研究員
	豊田 有加	第1研究部 主任研究員

4. 議事

- (1) 大台ヶ原自然再生事業における令和6年度業務実施結果
- (2) 「推進計画2014」中間評価書、第3次計画及び「シカ特定計画」（第5期）の策定について
- (3) 大台ヶ原自然再生事業における令和7年度業務実施計画(案)
- (4) 令和7年度大台ヶ原自然再生推進委員会及び関係ワーキンググループの開催予定（案）

5. 概要：

村上委員が大台ヶ原自然再生推進委員会議長に選出された。

- (1) 大台ヶ原自然再生事業における令和6年度業務実施結果

【報告・検討結果の概要】

- ・ 令和6年度大台ヶ原自然再生業務の実施結果報告を行った。
- ・ 森林生態系の保全・再生については、新たな懸念事項としてナラ枯れの問題が出てきた。ナラ枯れにより林冠ギャップができることが問題となる。
- ・ ニホンジカの個体群管理については、捕獲目標に達しない状況が問題である。わなに対してシカが慣れてしまったなど、理由を検討する必要がある。
- ・ 西大台ではシカの生息密度が5頭/km²以下でも植生が回復していない。シカの生息密度の減少

に伴い、ササの稈高は回復しているが、このまま稈高が上がり続けるのかはわからない。今後はスゲなどササ以外の種についても見ていくことが必要。

- ・ シカの目標生息密度の設定が今後の課題である。目標はシカを減少させることではなく、植生を回復させることである。
- ・ 持続可能な利用の推進について、環境省による取組や、登録ガイドによるツアーイベントなどが行われているが、実際にどれくらい盛り上がっているのか、状況を知りたい。
- ・ ガイド養成講座を一般の人向けに無料公開するなど、外に向けた取組についても検討してはどうか。
- ・ 普及啓発については、近年では進んできているが、地元だけでなく、奈良県や大阪府など、近隣の人たちを盛り上げていければよいと思う。
- ・ 外部の方の関心が薄れ、意見を聞く機会が減っている。外への情報発信が不足してマンネリ化していると感じる。外部の方を巻き込むようなシンポジウムや取り組みが求められるのではないか。
- ・ 平均気温が高くなると、高標高地域での影響は低地よりも大きく、積雪量に影響があり、シカの動きにも変化が生じる。目標とする植生回復のあり方も変わってくる。今後、気候変動は避けられないので、念頭に議論を進める必要がある。
- ・ 西大台、東大台は別個という見方でシカの目標生息密度、植生回復の指標をともに検討をしたらよいのではないか。シカの生息場所の管理、餌のキャパシティが問題で、とにかくシカを捕獲する方針からの転換が必要である。

【主な意見】

- ・ 森林生態系の保全・再生では、ナラ枯れが新たな懸念事項として出てきた。自然現象なので仕方がないことかと思う。しかし、ブナに穿孔が出来て枯れたという事象は聞いたことがない。注視していくべきかと思う。ニホンジカの個体群管理では、シカの生息密度は上がったとも下がったとも言えない。アクシデント的な出来事が発生したときに、詳細をはっきりさせて共有した方がよいのではないか。ササの稈高については、今後柵外ではこのまま頭打ちになるのではないか。
- ・ ニホンジカの個体群管理について、捕獲目標に達しない状況をどうするか。スレ個体の発生によるものなのかを検討すること。東西で状況が異なる。今後は東西地区で分けて対策を検討することも一つの方法ではないか。
- ・ ニホンジカがどのようなものを食べていて、どのような影響があるのかが重要なポイントである。西大台は生息密度が5頭/km²以下になっているのに植生は回復してこない。5頭/km²以下でも植生へのインパクトが強い状況が続いているのか。シカの生息密度の減少にともないササ類の稈高は回復しているが、このまま稈高が上がり続けるのかはわからない。今後はスゲなど、ササ以外の種についても見ていくことが必要。ブナへの穿孔は資料の写真のとおり、キクイムシ系の幼虫が入ったことは事実である。大台ヶ原のように標高の高いところのナラ枯れは、時間をかけて菌が繁殖するタイプの枯れだと思う。
- ・ ブナ等が枯れることよりもギャップが問題となる。17年に枯れた森林が5年ぐらいをかけて元に戻っている。天然林ではギャップは下層環境が大きく異なる。森林的環境が衰退しているのか衰退していないかが問題である。ササが回復しても森林的環境とはリンクしない。そこを間違えないようにしないといけない。国民目線でいうと環境省が20年も捕獲をしてきてどうなのか、もう少し戦略的なくくりわなのかけ方はないのかというような議論も出ている段階であり、そ

こを含めて頭の切り替えが必要。

- ・ 柵外でどういう取組をしていくのかが論点となる。植生衰退とは何なのか、目標設定が必要となる。植生回復が目標であってシカの数減らすことではない。目標密度の設定がこれからの課題。考え方の変換が必要となっている。
- ・ 持続可能な利用の推進関連について、環境省やガイドが実施しているものもあるが、どれくらい盛り上がっているのか、課題がどれくらいあるのかが気になっている。ガイド養成講座については、一般の利用者が知ってもよい内容だと思うので、無料で公開してもよいのではないかと。環境省の取組が外向きではないような気がする。
- ・ 普及啓発については、ここ2、3年では進歩している。もう少し発展させ、奈良、大阪などの近隣の人たちを盛り上げていければよいと思う。委員会も最近は傍聴者が少ない。大台ヶ原が魅力的な場所であることに興味をもってもらい、活動している団体ももっと発言できる場になるとよいと思う。
- ・ 外部の方の関心が薄れ、意見を聞く機会が減っていることは残念だ。外への情報発信が不足してマンネリ化していると感じる。外部の方を巻き込むようなシンポジウムや取り組みが求められるのではないかと。
- ・ 今後の課題として来年度以降の取り組みで検討したい。
- ・ 植生調査については、科学的な評価のためにコケ探勝路のササ刈り試験や、ササ稈高調査などの、トランセクトの面積や、サイズ、プロットの大きさを示す必要がある。
- ・ 平均気温の上昇を懸念している。高温になると、高標高地域での影響は低地よりも大きく、積雪量に影響があり、シカの動きに変化が生じる。目標とする植生回復のあり方も変わってくる。今後、気候変動は避けられないので、それを念頭に議論を進める必要がある。シカの管理については、捕獲をやめると個体数が増えてしまうので、粛々と継続し、生息密度を高めない努力は必要と考える。
- ・ 西大台、東大台は別という見方でシカ密度・植生ともに検討をしたらよいのではと思う。生息場所の管理、餌のキャパシティが問題で、とにかくシカを捕獲する方針からの転換が必要かと考えている。
- ・ 変動値が相当あり年間平均では見えないが、激しい雨が降っているときがある。表土・細粒土が流れ、流亡・流合する。根の露出、森林衰退が生じている。大台ヶ原内の土壌の流出箇所、非流出箇所の情報を、現場中心に集めたい。苗木の植樹を視野に入れ、地元との連携を強化すべきと思う。林野庁の針広混交林事業も、前提に苗木生産がないと実施できない。現在天然更新する状況になく、生産者に生産素地があるうちに視野に入れ進めないと森林生態系の回復は進まないと考える。
- ・ 伊吹山とは違い、大台ヶ原の土壌流出は少ないと思っている。大台ヶ原でどういうことが起こっているのかをチェックする必要がある。苗木の生産については、トウヒ林に直接植えるのではなく、植生遷移の考え方を含めて、検討する必要がある。
- ・ 流亡は木道下などで事実として起こっている。苗木も生産方法が変わってきている。(高田委員)
- ・ 今後のWGにおいて検討すべき課題と思う。

(2) 「推進計画 2014」中間評価書、第3次計画及び「シカ特定計画」(第5期)の策定について

【報告・検討結果の概要】

- ・ 「推進計画 2014」中間評価書案、「推進計画 2014」(第3次)計画案、「シカ特定計画」(第5期)

案について、説明した。

○中間評価書案について

- ・ ネイチャーポジティブに向けどう発展させていくかが次の課題である。
- ・ 中間評価書の課題と総括部分について、コマドリについての記載がない。コマドリは関心が高いため、総括でも触れておく必要がある。ササ類の回復はコマドリが頻繁に出現するまでの状況に達していないということも一つの評価である。
- ・ シカの捕獲効率が低下しているため目標を達成していない。捕獲効率低下に対する捕獲努力量の設定が論点である。予算・人的資源の制約もある。目標はシカの生息密度の設定ではなく、植生を回復させることである。

○推進計画 2014（第3次）案について

- ・ 植生タイプはヒノキ林、溪畔林などが含まれていない。生物多様性の観点から、どこかの段階で変えたほうがよいと考える。それぞれの植生タイプの面積も示すべきである。
- ・ 目指す大台ヶ原の図は図の見方の凡例が必要である。
- ・ 防鹿柵は非常に効果が高く、シカが防鹿柵内に侵入していない。シカによる影響を受けない中で森林生態系が保全されるのか、柵の中で何が起きているのか把握する必要がある。モニタリング調査を行い、柵を設置する意義・適用性について検討する必要がある。
- ・ 剥皮防止用ネットの金属製ネットから樹脂製ネットへの更新状況については、これまでの実績を取りまとめておく。

○シカ特定計画（第5期）案について

- ・ 利用度と利用強度とは異なる。現状はカメラの撮影頻度を見ているだけで利用強度の調査はしていない。例えば、頭を下げて採食しているか、通り過ぎているかというような形で定義して、その場所での影響を正確に評価する。そのことを利用強度と表現している。第4期の繰り返しにならないよう第5期での成果を得るために、シカの個体数管理のための指標を得たいという考えを示した。

【主な意見】

○中間評価書案について

- ・ ネイチャーポジティブに向けどう発展させていくかが次の課題である。利用についても今まで何をしていたのかの確認をするということは大事な部分なのでこういった形で取りまとめている。振り返りと評価を行い、次の10年計画を作成したい。
- ・ 中間評価書の課題と総括の生物多様性のところで鳥類について記載されている。コマドリとコルリは東大台と西大台で住み分けをしている。コマドリは東大台で回復傾向だが、コルリはここ数年、東大台では減ったと感じる。コルリは西大台で繁殖していることが多く、西大台の植生回復が進んでいないことから、今年は調査時にコルリにも注目していきたいと思っている。
- ・ 利用に関しては、他地域に比べ外国人観光客が大台ヶ原の魅力が届いていないのではないかと感じている。よりアピールしていくべき。
- ・ コマドリは以前は数が多く、一般からの関心度が高いので総括と課題にも示してよいのではないかと感じる。保全の効果が少しは出ているのではないかと感じる。
- ・ P101に記述はしているが、防鹿柵内でのササ類の回復はコマドリが頻繁に出現する状況には達

していないと考えられた、という結論になっており、総括と課題には記載しなかった。(事務局)

- ・ 植生回復が一定状況に到達していないのも1つの評価なので、コマドリについて言及は欲しいところである。
- ・ コマドリ調査隊の調査結果はどうか。
- ・ コマドリ調査隊は環境省による調査ではなく、有志による調査であることから中間評価書には含めないこととしたい。(環境省)
- ・ 総括と課題には、コマドリが回復傾向にあるという話もあるが、環境省の調査においてはまだ回復傾向が見られていないということを書けばよいと思う。
- ・ ニホンジカの個体群管理については、捕獲効率が低下しているため目標を達成していない。捕獲効率低下に対する捕獲努力量の設定が論点である。予算・人的資源の制約もある。目標はシカの生息密度の設定ではなく、植生を回復させることである。
- ・ ・ P17 と P88、89 の植生図の色が異なるのはデータソースや凡例統合の違いのためか。
⇒P17 の植生図は本業務で撮影した航空写真を参照し作成したもの、P88、89 の植生図は環境省生物多様性センターの 1/25,000 植生図のデータを用いて凡例をまとめて示したものであり、P17 のほうが細かくなっている。(事務局)
- ・ 針葉樹などを示す赤と緑の色使いは、統一を検討してほしい。

○推進計画 2014 (第3次) 案について

- ・ 2014 計画 (第3次) で示されている植生タイプはヒノキ林、溪畔林などが含まれていない。生物多様性の観点から、どこかの段階で変えたほうがよいと考える。それぞれの植生タイプの面積も示すべきである。ネイチャーポジティブに関する引用も、大台ヶ原は OECM には入らないと思うが、自然共生サイトなど新しい要素を入れて今日の状況を反映したほうがよい。
⇒今回は、推進計画 2014 年の中の第3次計画であり、これまでと大きくは変えないということ進めてきている。今の視点で見ると確かに不十分な部分があると思うが、P4、5 で重要な部分を含んだイメージを記載している。
- ・ 剥皮防止用ネットについて、金属製ネットから樹脂製ネットへの更新状況が知りたい。
⇒計画的なものではなく、予算を加味して年間 200 本程度、はがれたものを順次まき直している。(環境省)
⇒15 年間の期間内で節目として行えた実績が何かあるといい。現状を把握しておいて欲しい。
- ・ 防鹿柵については、非常に効果が高く、シカが防鹿柵内に侵入していない。植生が傷まず保たれている。シカがいなくても森林生態系の保全が可能かという観点もある。柵内でどのようなことが起きているのか把握する必要がある、モニタリング調査を行い、柵を設置する意義・適用性について検討する必要があると考えている。
- ・ P8 の生息環境管理、3 段落目の「設置する」の主語がないので確認してほしい。

○シカ特定計画 (第5期) 案について

- ・ 利用度と利用強度とは異なる。現状はカメラの撮影頻度を見ているだけで利用強度の調査はし

ていない。例えば、頭を下げて採食しているか、通り過ぎているかというような形で定義して、その場所での影響を正確に評価する。そのことを利用強度と表現している。第4期の繰り返しにならないよう第5期での成果を得るために、シカの個体数管理のための指標を得たいという考えを示した。

⇒この課題については今後、ニホンジカ個体群管理WG内で明確にしたい。

- ・ 目指す大台ヶ原の姿の図について、色がついている箇所は、変化したところなのか。説明を示す必要がある。
- ・ ミヤコザサの刈り取りや苗木の植栽等の具体的な計画はあるのか。

⇒具体的な計画は第3次計画で検討していくこととしている。新しい取り組みで何ができるかについて、シカ特定計画第5期、2014計画第3次で検討する予定である。(環境省)

(3) 大台ヶ原自然再生事業における令和7年度業務実施計画(案)

(4) 令和7年度大台ヶ原自然再生推進委員会及び関係ワーキンググループの開催予定(案)

【報告・検討結果の概要】

- ・ 大台ヶ原自然再生事業における令和7年度業務実施計画案、推進委員会、ワーキンググループ開催計画案について、説明した。
- ・ 令和7年度業務実施計画については了承された。

以上